

この十八年を振り返って

林 郁 弥

私は、昭和五十一年四月広島文教女子大学の短期大学部服飾学科へ赴任してから今年で十八年になります。服飾学科は平成元年に生活科学科と学科名が改称されましたが、この間、武田ミキ前学長先生には「あなたの学科は本

学の先祖ですよ。しつかりしなさい」といつも厳しく、しかし、暖かい心で、また、大きな期待をもってご指導いただきました。

この十八年間に振り返ってみて、先生のご期待にどこまで沿いえたか、このことを思うと恥しい限りです。もっともつと努力しなければと思います。

この十八年間に、先生からは物を大切に、質素に生きること、努力の尊さを教えていただきました。本学へ赴任した日、私の事務机は用意されていませんでした。学長先生の指示で文学部棟の四階にあった倉庫から古い木製の机を選んで自分の研究室へ運びました。その机は古く、机の引出しの下はささくれて、手が当たるとげがささったり、ズボンを引つ掛けたりします。そこで今もそこにはセロテープを貼りささくれを止めて使っています。このことに私は不満を言っているのではなく、当時の本学の情況を示す一例にすぎません。

武田ミキ学長は、学内全般にわたり物を大切に、質素儉約を旨として現在の本学の経営の基礎を築かれたものと考えます。近年、本学も見違えるように美しく整備されてきつつあります。また、いろいろと変革が進みつつありますが、これまで十八年間本学に在籍した私には、あまりの変化に、また、変化のテンポに戸惑いを感じる時があります。これでいいのだろうか、大丈夫だろうか、気がかりに思う時があります。

私は、昭和五十九、六十年の二年間学生部長を務めさせていただきました。この間、学生と学長の間に立ち何とか苦勞なこともありましたが、振り返ってみると学生部長のこの二年間、学長先生とは特に親しくお話しする機会を多く持つことができました。放課後学長室を尋ねては長時間にわたり、学生部に関することは勿論、先生のこれまでのご苦勞話や学生指導の進め方、学科のことなどいろいろとお話を伺いました。今はその時のことがとても懐

かしく想い出されます。

学生部に関することで最も印象に残っていることがあります。それは、大学祭の後夜祭でファイヤーをたきますが、その火の後始末が例年午前二時とか三時になっていました。そこで学長先生にお願いして後夜祭の当夜、学生部の教員約十名を恩頼堂に泊めていただくことにしました。このことは初めてのことでしたが、学長先生自ら我々学生部の教員が寝る布団の世話や翌朝の食事の手配まで、こと細かに進めていただき、我々一同本当に感激しました。学長先生は、学生部の教員の苦勞に対して心から感謝の意を表したい一心であったように思います。今教えてみると、当時学長先生は八十二才のご高齢であったことに気付きました。このことに驚くとともに、恐れ多いことだったと思います。先生の情の深さに改めて感謝する次第です。